

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	国語科教育における「戦争」と「平和」：戦争児童文学教材史を踏まえて
Author(s)	黒川, 麻実
Citation	国語教育思想研究, 32 : 47 - 56
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054799
Right	
Relation	



国語科教育における「戦争」と「平和」 —戦争児童文学教材史を踏まえて—

大阪樟蔭女子大学 黒川 麻実

キーワード：戦争児童文学，平和教材，軍国美談

1. はじめに

1.1. 『はだしのゲン』論争から見える平和教育を巡る問題

太平洋戦争の終結から 78 年の月日が経とうとしている今、ロシアのウクライナ侵攻に伴い、核兵器使用の恐怖が、再び世界に不安を齎している。

そんな中、広島市に投下された核兵器による被害を描いた中沢啓治による漫画『はだしのゲン』が、広島で使用されている平和教育教材『ひろしま平和ノート』2023 年度版から削除されることが決定し、議論を巻き起こしている。人類史上最初の被爆地である広島市では、これまで自主的に推し進めてきた平和教育について、そのあり様を再検討し体系化した「平和教育プログラム」を 2013 年から策定・施行している。その中で、『はだしのゲン』は小学校 3 年生向けの教材に掲載され、家計を助けようと浪曲を歌って小銭を稼いだり、栄養不足で体調を崩した母親に食べさせようと池のコイを盗んだりするシーンが引用されている。

しかし、平和教育プログラムの改訂に際し、広島市教育委員会は「漫画の一部を教材としているため、被爆の実相に迫りにくい。」、また「浪曲の場面は、児童の実態に合わない。鯉を盗む描写は、誤解を与える恐れがあり、補足教材が必要となるため、教材として扱うことが難しい。」とし、別の被爆者の体験談に差し替えられることが決定した¹。この決定に対し、経緯の説明や方針撤回を求める申し込みを求める声が、日本被団協などから相次いでいる²。また、『はだしのゲン』を巡っては、2013 年に松江市の小中学校で、描写が過激であるとし、閲覧や貸し出しの制限を行った³ことが問題になり、この決定は後に撤回されることとなった。

これらの『はだしのゲン』を巡る論争から、核兵器による「被爆の実相に迫る」ことのできる教材とは何か、また当時の社会状況をそのまま表現した描写、過激な描写が今の「児童の実態に合わない」のであれば、どのような教材や読み物が適切なのか、

今一度考えていく必要があることが示唆されている。何より今の子ども達に必要な平和教育とは何かを考えさせられる話題である。

1.2. 小学校国語科教育が担ってきた戦争児童文学教材の功罪

池野(2009)によると一般的に小学校段階の教科教育における平和教育は、地域・学校によって差異はあるものの、社会科、国語科、音楽科においても行われている。小学校国語科教育における平和教育において、大槻(2005)は次のように述べる。

国語科教育は、直接的な平和教育においても重要な役割をになっている。戦争児童文学や戦争体験記などを読ませること、戦争体験の聞き書きをさせることなどは、戦争体験をもたない子どもたちに、間接的ではあれ、戦争を体験させることになる。(大槻, 2005 : 134)

このように小学校国語科教育では戦争児童文学の読み取りを中心に、「戦争」や「平和」を主題に据えた平和教育を推し進めてきた。

一方で、戦争児童文学を読ませさえすればそれで平和教育になるのかという批判の声や、戦争や原爆の悲惨さや非人間性をリアルに実感させることに拘泥しているのではないかという指摘も行われていると大槻(1984)は述べる。また、川端(2013)は次のように戦争児童文学やその教材化について警鐘を鳴らしている。

いまや、多くの子どもたちにとって戦争児童文学は、「だから、戦争はいけないと思いました」と感想を書けばよけて通れる、怖くて悲しくて重くていやな本となっている。(中略：論者)児童文学創作や評論の場では新たな戦争児童文学の試みがなされていても、小学校の教科書に載っている平和教材がいかにも古く、生徒の実情に合っていないことも問題である。(川端, 2013 : 196)

さらに「不条理な被害をこうむったという被害者意識ばかりが強く、戦局の全体を見わたすことができている」(p. 195)といった、加害者意識の視点の

少なさも問題に挙げられている。この点については目黒(2007)も、「一つの花」や「川とノリオ」、「お母さんの木」などの“定番”と呼ばれる戦争児童文学教材について、母性と自然が強調されることにより、戦争の人為的側面の印象が弱まり、日本の戦争被害者としての立場が強調されていると指摘する。

加えて、ユルマズ・溝上(2014)は、「教科書で挙げられた作品を踏まえながら得られた戦争の意識を生徒たち自身の観点と合体し、形成しようとしている。」(p. 59)と述べ、教科書教材が戦争記憶の伝達形成の一端を担っていると述べている。

このように、日本の戦争児童文学教材は、戦争を知らない教師や学習者に対し戦争の記憶を伝達する重要な役割を担いつつも、現状は「戦争」や「平和」の問題を自分ごととして捉えることが難しく、平和教育として形骸化しているのではないかと考えられる。

1.3. 本研究の目的および方法

そこで本研究では、これまでの小学校国語科教育における戦争児童文学教材がどのように変遷し、そこにどのような思想があったのか、背景に存在する戦争児童文学の流れを抑えつつ、その内実を明らかにすることで、戦争児童文学教材の功罪に迫りたい。

具体的には、まず本研究の土台となる戦争児童文学の定義やについて整理し、戦争児童文学そのものの傾向や抱える問題を明らかにする。次に、現代に至るまでの戦争児童文学と教材について、大きく太平洋戦争以前と以降に分け、潮流を明らかにする。戦前までの戦争児童文学、軍事教材の流れを踏まえた上で、戦後から現在に至るまでにどのような教材が小学校国語科教科書登場にし、退場していったのか、特に現在教材として採録されていない教材に焦点を当て、「なぜ教科書から消えてしまったのか」を考察することで、戦争児童文学教材の持つ課題を深究する。これらを踏まえた上で、今日的な視座に即した戦争児童文学教材とは何かについて、今後の方向性についての提言を行う。

2. 戦争児童文学とは何か—用語を巡る論争—

まず、本研究で取り上げる戦争児童文学について、その名称を巡る議論についてまず整理する。

西山(2012)によると、戦争児童文学という用語は、小学校教員で平和教育に取り組んでいた石上正夫がきっかけで1960年代に登場した。当時の石上は、少

年週刊誌などに満載された熱血戦争漫画などによって作り出された子ども達の戦争観をどうやって軌道修正するかを課題とし、戦争を描いた作品、すなわち戦争そのものを描いた作品、戦争と人間のかかわりを描いた作品を、一般の児童文学の作品群の中から選び出し利用しやすくするために戦争児童文学という区分を意識的に用いたと述べている(西山, 2012:116-117)。

これに対し、関口は「これはまったく安易で、不注意な命名であり、その意図を正しく伝えるためには、反戦児童文学、もしくは反戦平和児童文学と呼ぶべきであった」(関口, 1988:433)と批判し、戦争児童文学を反戦平和の願いを託した児童文学と定義している。一方、長谷川(1993)は、戦争児童文学を反戦的なものと限定すると、戦前・戦中のいわゆる「好戦的」な児童文学が子どもの軍国主義化に与えた影響も視野から外れてしまうと、戦争児童文学の概念を拡大することを指摘している。

すなわち長谷川の定義に基づくと、広義な意味での戦争児童文学は、戦争を素材にしたものであり、古くは日清・日露戦争、そして太平洋戦争が対象となっている。また一部の例外を除き、戦前の戦争児童文学は戦争を正義とする軍国主義的なものであった。そして戦後、太平洋戦争での敗戦を経験した日本において、戦争児童文学は、全く反転した思想を持つことになった。狭義の意味での戦争児童文学とは、この1963年頃から高揚期を迎えた、反戦・平和の立場から描かれた作品を指すといえる。

また、関口(1988)が「日本人を戦争の被害者として描く作品が多いが、加害者としての日本人に視点を置いた反戦児童文学の必要性も叫ばれている」(p. 433)と述べるように、植民地下に置かれた東アジア諸国を描いた作品や、戦時下やその後の沖縄を巡る様相なども戦争児童文学という枠組みから外してはならない。長谷川(2012)が「そもそも「戦争」とは何かという定義の問題がかかわってくる」(p. 6)と述べるように、戦争児童文学における「戦争」が何を示すのかについても注意が必要である。

さらに宮川(1992)が、戦争児童文学が太平洋戦争を素材とする限り、直接体験による語りの手法は形骸化し臨界点に達してしまうことに触れ、「「戦争児童文学」という考え方を廃止」(p. 64)し、その枠組み自体を取り払うことで、戦争児童文学への考え方を相対化する必要があると述べるように、これか

らの戦争児童文学は、ここまで積み重ねてきた作品の先を行く必要性が 1990 年代から指摘されていたといえる。

3. 戦前の戦争児童文学と国定国語教科書

先に取り上げた長谷川が戦争児童文学の定義を広く戦前のいわゆる好戦・向戦作品にまで拡大して使用することを主張した背景には、

(戦前戦中において戦争を扱った大部分のものが：論者注)無視されると、戦争を賛美し肯定する作品が大量に子どもたちに渡され、子どもの軍国主義化に大きな役割を果たしてきたことが埋もれてしまう。(長谷川, 2017:18)

という主張があった。戦争児童文学教材をより俯瞰的な視点から考察するためにも、本研究ではまず、戦前における広義的な意味での戦争児童文学の潮流を確認し、戦前の小学校国語科教科書(以下、国語国定教科書)と戦争との関りについて明らかにする。

3.1. 太平洋戦争以前の戦争児童文学の潮流

長谷川の広義的な意味での戦争児童文学を対象とするならば、長谷川が何をもって「戦争」とするかを課題としたように、夥しい数の「合戦・乱・変・陣・役」までもが含まれることとなる。そこで本研究では、日本の近代以降から、また戦争児童文学の大きな転換点となる太平洋戦争を境界に、主な作品のみを取り上げ概説する。

近代日本が初めて国外と大きな戦争を体験したのは 1894 年に勃発した日清戦争であり、その勝利が欧米諸国から劣等視されていた日本を帝国主義に押し上げる一歩となり、国内において戦争への批判はほとんどなかったとされる。ちょうどその頃、近代日本児童文学の先駆者とされる巖谷小波が主幹を務めた児童向け雑誌『少年世界』が刊行されるが、日清戦争の最中ということもあり、既に戦時色の強い、向戦的な作品が見受けられる。ただ、戦争や軍人を単純に美化するのではなく、戦争の当事国などを動植物に擬人化するなどして、ユーモアを利かせた趣向となっている。

しかし、日露戦争までの三国干渉、遼東半島の領有放棄は、国民の憤慨を生み、ナショナリズムが高揚する。先に取り上げた雑誌『少年世界』では、「露西亜征伐」と題された戦争特集が組まれ増刊されるなど、戦時対応の作品が多く登場している。また、後述する戦前の教科書教材に採用された、木口

小平や広瀬武夫などを取り上げた軍国美談なども誕生する。

1904 年の日露戦争前後においても反戦・非戦的な作品は殆ど見受けられないが、大正期に入ると、第一次世界大戦との距離感、また大正デモクラシーによる児童中心・尊重の思潮から反戦童話も見られるようになる。当時の児童向け雑誌で言うなれば、1918 年創刊の「赤い鳥」が個人主義的で反戦・非戦傾向に、1914 年に創刊された『少年倶楽部』が国家主義的で好戦・向戦傾向があった。しかしながら、浜野(1992)によると、明治期・昭和期と比較すると大正期は戦争児童文学そのものの量が少なかったとされている。

太平洋戦争の皮切りとなる日中戦争が始まると、日本では 1938 年に「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が出され、児童書は国家の統制下に置かれ、自由な表現は奪われ、戦時体制の国体原理主義に与していくようになる。それは 1920 年に「野薔薇」で厭戦的な作品を描いていた小川未明が、1937 年に「ぼくも戦争に行くんだ」を発表し戦争を賛美するようになることから伺えるように、児童文学作家もこれまでの作品傾向をも一変させる。また出版社もその影響を受け、1936 年から刊行されていた『講談社の絵本』シリーズは日中戦争を機に争美談・戦場美談・軍事美談・軍国美談に関するものが多く登場するようになる。

さらに戦況が著しく悪化すると、「少年兵物」と呼ばれる読み物の一群が、少年兵募集の一環として暗躍する。例えば、北村小松が 1937 年に手掛けた『少年航空兵』の巻末には「陸軍少年航空兵志願者のために」という志願案内を 90 ページに渡り掲載されている。長谷川(1995)が「アジア・太平洋戦争期に少年兵物がどっと出てきたのには、戦争における兵士の消耗の激しさ、補充を急がなければならない軍の状況が背後にある」(p. 33)と指摘するように、児童文学者の生み出す作品と戦況が呼応していたことが伺える。

このように、戦時下の言論弾圧・言論統制のもとで自由にペンを走らせることが叶わなかったという状況、また時代の心性に飲み込まれ好戦の思想に取り込まれてしまった事実が、戦前の戦争児童文学には存在していた。そして、それを読む子ども達に強い影響と痕跡を残してしまったのである。

3.2. 国定国語教科書における軍事教材

【表1】国定国語教科書における軍事教材(中内, 1988:225-228)

巻	第一期(1904-1909)	巻	第二期(1910-1917)	第三期(1918-1932)
一	ヘイタイゴッコ	一		
五	軍艦/黄海の戦	五		金鶏勳章
六	明治二十七八年戦役/北白川宮	六		入営した兄から
七		七	広瀬中佐	大連だより/一太郎やあい
八	武雄の入営/軍人/赤十字の社	八	橋中佐	広瀬中佐/乃木大将の幼年時代
高小一	靖国神社/感心な母	九	水兵の母/我が陸軍/靖国神社	トラック島便り/水師營の会見/軍艦生活の朝/北風豪/水兵の母
高小二	わが陸軍	十	入営する友におくる/水師營の会見/兵營内の生活/進水式	伝書鳩/進水式
高小三	わが国の海軍/聯隊旗	十一	我海軍/出征兵士	
高小四	明治三十三年清国事変	十二	日本海海戦/日本の女子/軍人に賜はりたる勅語	
巻	第四期(1933-1940)	巻	第五期(1941-1945)	
一	ヘイタイノススメ	ヨミカタ一	ヘイタイサン	
二		ヨミカタ二	兵タイゴッコ	
三		よみかた三	軍かん/お話	
四	海軍のにいさん/ニイサンノ入営	よみかた四	海軍のにいさん/満洲の冬/にいさんの入営/金くんしょう/支那の子ども	
五	犬のてがら	一	支那の春/にいさんの愛馬/カッターの競争/軍犬利根	
六	軍旗/潜水艦/東郷元帥	二	潜水艦/南洋/映画/軍旗/あもん袋/三勇士	
七	兵營だより/乃木大将の幼年時代	三	靖国神社/東郷元帥	
八	大演習/小さい伝令使/大連だより/広瀬中佐/橋中佐	四	大連から/観艦式/大演習/小さい伝令使/広瀬中佐/大砲のできるまで/防空監視哨/早春の満洲	
九	水兵の母/南洋だより/水師營の会見/「あじあ」に乗りて	五	戦地の父から/スレンパンの少女/軍艦生活の朝/動員/「あじあ」に乗りて(付)/大地を開く(付)/草原のオボ(付)	
十	日本海海戦	六	水兵の母/姿なき入城/十二月八日/不沈艦の最後/水師營/敵前上陸/病院船/愛路少年隊(付)/湖同風景(付)	
十一	空中戦	七	永久王/日本海海戦/兵營だより/ゆかしい心/ジャワ風景(付)/ビスマルク諸島(付)/セレベスのあなか(付)/サラワクの印象(付)	
十二	支那の印象/ほまれの記章	八	ダバオへ/マライを進む/シンガポール陥落の夜/もののふの情/太平洋/熱帯の海(付)/洋上哨戒飛行(付)/レキシントン撃沈記(付)/珊瑚海の勝利(付)	

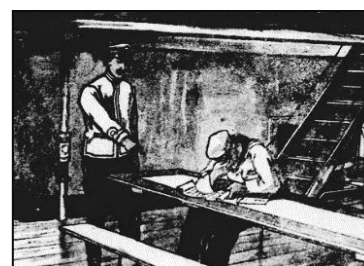
※1-第一期から第三期までの巻二から四までは該当教材が無かったため割愛した。

※2-修身教科書、国語国定教科書修正本については紙面の関係上割愛した。※3-(付)は付録のことを指す

前項で確認したように、太平洋以前においては反戦的な作品は多くなく、国語国定教科書においても、軍国主義に則った教材が多く登場してきた。また、戦後に確認できるような文学的な形態の戦争児童文学より、伝記的な形態の軍国美談が殆どである。そこで本項においては、国語国定教科書にどのような「軍事教材」が掲載されてきたのか確認する。

戦前の国語国定教科書の軍事教材については、中内(1988)によって【表1】のように明らかにされている。期を重ねるごとに軍事教材の数は増加し、特に第五期は戦中ということもあり、かなりの量の軍事教材が採用されている。また、その特徴について中内(1988)は、乃木希典関係、入隊・兵役関係、靖国関係、軍国の母関係を「強い教材」と称し、「日本の軍隊と軍事行為の正当性と永遠性の論証と宣伝、つまりその「美談」化におかれてきた」(pp. 19-20)と分析する。そのうち、国語国定教科書の全期に渡って⁴登場する「水兵の母」について確認する。

本教材は、水兵の母による手紙を中心にしたノンフィクション風の教材であり、日清戦争に実際に起こった出来事を題材にして【図1】。付属の趣意書には、



【図1】文部省(1942)「水兵の母」『初等科国語・第6』, (p. 11 挿絵抜粋)

この教材に現れる一水兵の母は、戦場に出た以上は、一命を捨てて、君の御恩に報ゆることこそをその子に諭す母親である。換言すれば、陛下の御ために愛子が死ぬることこそ、愛子を永遠に活かす道であると堅く信じて疑わない母である。そこに、皇国の母としての考え方の正しさとけだかさがある。(文部省, 1943:22)とあり、「水平の母」を通した戦意昂揚を意図していると考えられる。なお中内によると、この「水兵

の母」に登場する水兵のモデルとなった人物は、現実には病弱で船から下りるよう命令を受け、エピソードが出た後にほどなくして人々の目を避けて鹿児島県の故郷へ帰りその後、病死している。このように当時の軍国美談は物語化する際に、より神話化するために捏造・改作したものが多くとされている。他にも数多くの戦争児童文学が国定教科書に登場していたが、敗戦後の墨塗りによって姿を消す。

3.3. 戦前の戦争児童文学や軍事教材から見えるもの

以上、太平洋以前の戦争児童文学の潮流と、国定国語教科書における軍事教材の様相について確認した。こうしてみると、戦前の戦争児童文学や国定国語教科書教材が社会状況と呼応する形で、子ども達に戦争や戦争に関わる軍、兵士、軍馬などを魅力的なものだと思わせていったプロセスを確認することができる。自らも軍国少年として戦時下を過ごし、戦後は児童文学作家として活躍している山中が、「もし自分が、その当時、プロの児童文学作家であったとしたら、このような(銃後督戦的な：論者注)作品にいっさい筆を染めなかったらどうか？」(山中, 2010:353)と自問し、自らを「臆病な小心者」であるから難しかっただろうと述べる。また、「未明は侵略戦争の全貌を知らされて、がくぜんとする。いや未明にかぎらず、おおよその文学者、文化人のたどった道である。」(浜野, 1992:27)と述べるように、当時の狂気的な日本を取り囲む空気や国民の心性が、まさに児童文学作家や読本編纂者に対し「鹿を逐う者は山を見ず」という状況を生み出したのだといえる。

では、太平洋戦争終戦を機に戦争児童文学はどう転換していくのか。戦後の戦争児童文学と、その教材化などによって生み出された戦争児童文学教材について次項で取り上げていく。

4. 太平洋戦争以降の戦争児童文学が齎したもの

4.1. 太平洋戦争以降の戦争児童文学の潮流

太平洋戦争の終戦直後は、戦争児童文学といえる作品は少なかった。その背景にはGHQの出版物検閲という外的要因や、生活の影にまだ戦争の影が纏わりつく中で作品を創作できないといった内的要因が存在していた。その中で、1947年に登場した竹山道雄による『ビルマの豎琴』、1952年の壺井栄の『二十四の瞳』などが反戦意識から描かれ

た戦争児童文学の先駆けとして取り上げられ、共に映画化されるなど高い評価を受ける。ただ奥山(2012)が、加害者の視点や、世界史を踏まえた戦争の構造の追求は抜け落ちがちである指摘するように、戦争の実態に迫り切れない点が課題として挙げられる。

太平洋戦争の反省から反戦的視点による児童文学作品が本格的に台頭しはじめたのは、前項でも触れた「戦争児童文学」という用語が用いられ始めた1960年に入ってからである。この時期の多くの戦後児童文学は、作家の体験が基盤となっているところに特徴がある。その背景には、戦争の中で青年期や少年少女期を送り戦争を肯定してきた、そのように教育されてきた作家らが、敗戦後、戦争が否定すべきものであったことを知り、「戦争とは何か」という主題と対決することでその先に進もうとしたからである。またこの時期は作家＝戦争体験者、読者＝戦争を知らない子ども達という構図が登場している。そして戦争を「かつこいい」と感じてしまうような児童向け雑誌の潮流があり、作家達は戦争を語らねばならないという使命感を得、世代間の行き違いを乗り越えようとしたと考えられる。そのためこの時期は様々な手法で「戦争」を描こうとする模索の跡が見られる。例えば乙骨淑子による『ぴいちゃあしゅん』は、自身の体験ではなく虚構の中で中国を舞台にした少年兵を中心に描き、松谷みよこの『ふたりのイーダ』では民話的ファンタジーという手法を取り、那須正幹の『屋根裏の遠い旅』は現代の少年たちを戦争続行中の日本という架空の世界へといざなった。

そして1980年代から1990年代にかけ、戦争児童文学の枠組みの問い直しや、その内実についての問題提起などが行われた。宮川(2012)はこの時期の作品について「「戦争」を書くのではなく「戦争児童文学」を書こうとしている」(p. 129)と指摘し、戦争児童文学が飽和状態に至り、疲弊していることを指摘する。さらに、2000年代には戦争児童文学に限らず児童書販売が低迷し、かつ海外からの戦争児童文学が翻訳・紹介される中で、日本人による戦争児童文学の出版数は減少していく。その要因には、情報通信産業の発達が子供達を活字から遠ざけ、日本人全体の風潮として戦争の話題を避けている、という現状が存在している。そして冒頭でも述べたように、日本の戦争児童文学は書き

手の体験に基づく作品が多く、「戦争」に対する新しい思想・観点を開拓できていないという問題がある。一方で、2006年から「新しい戦争児童文学」委員会が立ち上がり、『おはなしのピースウォーク』シリーズが登場し、2018年には日本・中国・韓国の絵本作家による子どもたちにおける平和絵本シリーズが登場する⁵など、新たな戦争児童文学の再検討と再構築を働きかける試みも少しずつ登場している。

4.2. 戦後の戦争児童文学の役割と課題

戦後の戦争児童文学には、様々な使命を持って登場した。戦争を体験した作家自身の経験から来る悲しみや怒り、贖罪の気持ちの浄化や、時代が進むにつれ、戦争を知らない読者層が増えたことによる戦争体験の伝達、戦争で亡くなった死者の代弁などである。特に1960年・70年代には数多くの作品が排出された。一方で宮川の、

もしかしたら、今日の戦争児童文学は、戦争を描きながら、実は、楽観的な見とおしのほうにかけつづけているのではないか。作家たちは、戦争児童文学を書きつづけるということで、私たちは、戦争児童文学を読みつづけることで、安心しきっているのではないのか。(宮川, 1996:176)

という言葉に表れているように、「書くだけで安心、読むだけで安心」という現状が生まれていることや、これまで取り上げてきたように、戦前の児童文学者が戦争に肯定的な作品を排出し続けたこと、日本が東アジア諸国を占領し植民地化してきたことなどについては今だタブーとされている現状がある。

このような問題は教室で戦争児童文学を扱うことで、平和教育を行っている錯覚に陥っている可能性のある国語科教育の問題と通じるものがある。そこで、小学校国語科教科書における戦争児童文学教材の文脈を追い、「小学校の教科書に載っている平和教材がいかにも古く、生徒の実情に合っていないことも問題である」(川端, 2013:196)ことの実情を明らかにしていく。

5. 太平洋戦争以降に登場した戦争児童文学教材

5.1. 戦後の戦争児童文学教材の変遷

戦後直後の小学校国語教科書からは美談を謳う戦争児童文学教材は姿を消す。管見の限り、戦後の小学校国語科教科書に初めて登場した戦争児童文学は、1958年に『国語:6年下』(二葉)に採用された小

川未明の「野ばら」である。その後、1970年も半ばにさしかかると、小学校国語科教科書にも戦争児童文学が増加し始める。そこで、1974年版改訂小学校国語教科書から2020年度版までに登場した主な戦争児童文学教材の登場の様相を【表2】にまとめた。

最も長期間、教材として採用されているのは1974年度版から登場した今西祐行による「一つの花」である。1974年度版では日本書籍にのみ登場したが、1989年度版では日本書籍に加え、東京書籍、大阪書籍、教育出版、光村図書出版に掲載されている。そして2023年現在、4社すべての教科書に登場する定番教材と化している。次に採用年数の長い作品は今西祐行による「ヒロシマのうた」、次いでいぬいのみこによる「川とノリオ」、あまんきみこによる「ちいちゃんのかげおくり」と続き、これらの教材は現在の小学校国語科教科書に掲載され続けている。最も戦争児童文学教材の採用年度が多いのは1989年度から1996年度版にかけ、14作品の戦争児童文学教材が登場している。ただ、【表2】から確認できるように、戦争児童文学教材の数は減少傾向にある。特に2002年度版を境に、それまで掲載が続いていた教材群が一気に姿を消している。なぜこれらの教材が姿を消したのかについては次項で考察する。

一方で、入れ替わるように登場した小林豊による「世界一美しいぼくの村」はアフガニスタンのバグマンを舞台にしている。これまでは、太平洋戦争に纏わる戦争児童文学が大半を占めていたのに対し、現在進行形の世界の戦争と平和を題材にした本作品を取り入れた意味は大きい。また、2011年度版から登場した天野夏美による「いわたくんちのおばあちゃん」、2020年度版から登場した朽木祥による「たずねびと」は現代の小学生が主人公である。住田(2022)は、原爆や戦争を体験している世代が第一世代とするならば、この主人公たちが登場する作品を「第三世代戦争児童文学」と位置づけ、これまでの戦争児童文学とは異なる側面を持っていることを指摘している。具体的には、「いわたくんちのおばあちゃん」では現代—過去—現代という額縁構造を用い、原爆で家族を亡くしたおばあちゃんの戦争体験が語られていき、「たずねびと」では広島原爆とは縁遠い主人公が、偶然見かけた原爆供養塔納骨名簿に自分と同じ名前を見つけ興味持ち広島に向かうという内容となっている。

このように、2023年現在の国語科教科書における

【表 2】1974 年度版以降の戦争児童文学教材年表（稿者作成）

教材名	S49	S52	S55	S58	S51	H1	H4	H8	H12	H14	H17	H23	H27	R2	回数
野ばら															
かわいそうなぞう															4
救命艇の少年															3
一つの花															14
春先のひょう															7
村一番のさくらの木															2
お母さんの木															8
石うすの歌															8
ヒロシマのうた															13
山へ行く牛													資	資	10
チロヌップのきつね															6
おこりじぞう															7
川とノリオ															12
お母さんの紙びな															6
すいかの種															6
そして、トンキーもしんだ															2
ちいちゃんのかげおくり															10
えんぴつびな												資			5
ガラスの花よめさん															2
父ちゃんの凧												資	資		6
世界一美しいぼくの村															5
いわたくんちのおばあちゃん														資	3
たずねびと															1
採用作品数(資は除く)	5	10	12	12	14	15	14	14	11	7	7	6	6	6	

※ 1 - 「資」とは教科書巻末などに位置づけられている「資料」扱いの教材を指す

戦争児童文学教材は、1970 年代から 80 年代にかけ登場し今も教材として採用され続けている「一つの花」、「ヒロシマのうた」、「ちいちゃんのかげおくり」などの定番教材と「世界一美しいぼくの村」、「たずねびと」などの新しい形の戦争児童文学教材が、並行して掲載されている傾向であるといえる。

5. 2. 戦後の戦争児童文学教材を巡る問題史

なお、戦後の小学校国語科教科書における戦争児童文学教材を巡っては、様々な問題や議論が引き起こされてきた。本項では、現在は教科書から姿を消していった教材たちに焦点を当て、何が問題だったのかを推察していく。

まず、小川未明の「野ばら」を取り上げる。「野ばら」は、隣接する二つの国の兵士を巡る童話である。なお「野ばら」は、1920 年に発刊された「大正日日新聞」に「おとぎばな志野薔薇」として発表されているため、日本の敗戦後の反省から生まれた作品ではない。教材「野ばら」は同時期に複数の教科書に採用されるなどしていたが、田中(1984)によると、1959 年に古田足日が「さよなら未明」と題し近代童話を批判したことに始まる、作品に存在する「反戦思想」が果たして戦争児童文学教材として適格かという議論を引き起こし、

「野ばら」とい作品は、それが戦争教材とし

て適格か否かという問題もさることながら、そうした面からのみ見られ扱われることによって、文学的言語作品への、「読み」の行為の上で試みられ、配慮されるべきいくつかの点を見落とされてきてしまった(田中, 1984:29)ことから、「野ばら」は教科書から姿を消す。

戦争児童文学の中ではポピュラーな作品であるとされる「かわいそうなぞう」は、実際に戦時下の上野動物園で引き起こされた象の戦時猛獣処分をテーマにした作品である。1951 年に童話集『愛の学校・二年生』にて発表された後、1970 年に絵本化がなされ、1974 年に教材化がなされている。しかし、1981 年に長谷川が『季刊児童文学批評:創刊号』において、猛獣虐殺が行われた 1943 年はまだ作中にあるような空襲が切迫した状況ではなく、むしろ空襲を市民に身近に感じさせるために行われたプロパガンダの一種であったことが指摘され、「猛獣たちの虐殺と戦争とを漠然と結びつけたにとどまり、「神話」を流布してしまうという結果をもたらした」(長谷川, 2000:28)と批判する。この評論がきっかけとなり、1983 年に「かわいそうなぞう」は教材から姿を消す(長谷川, 2000:196)。入れ替わるように登場した「そして、トンキーも死んだ」は、「かわいそうなぞう」の反省を生かし忠実に描かれた猛獣虐殺をテ

マにした絵本だが、獣類の毒殺命令を出した人物の名前が出されていないことが1985年に指摘されたことがきっかけとなり、1989年度版を境に姿を消す。

そして、2002年度版を境に姿を消した教材には「お母さんの木」、「石うすの歌」、「おこりじぞう」、「お母さんの紙びな」、「すいかの種」、「えんぴつびな」またその前後において「チロヌップのきつね」、「ガラスの花よめさん」が教科書から姿を消している。これらの教材の初出年と作者についてまとめたものが【表3】である。

【表3】2002年前後に姿を消した戦争児童文学教材（稿者作成）

教材名	初出年	作者および出生年	
おかあさんの木	1969年	大川悦生	1930年
石うすの歌	1945年	壺井栄	1899年
チロヌップのきつね	1972年	高橋宏幸	1923年
おこりじぞう	1979年	山口勇子	1916年
お母さんの紙びな	1976年	長崎源之助	1924年
すいかの種	1971年	沖井千代子	1931年
えんぴつびな	1984年	長崎源之助	1924年
ガラスの花よめさん	1978年	長崎源之助	1924年

これらの作家たちは【表3】の出生年を見てわかる通り、戦争を直に体験した世代であり、作中に登場する登場人物も戦争被害者である。例えば「おこりじぞう」を手掛けた山口勇子は被爆者であり、「おこりじぞう」自体も被爆前後の広島が舞台である。また、「すいかの種」も広島原爆被害を描いた作品である。まさに、住田(2022)の言葉を借りるならばこれらの作品は第一世代による「第一世代戦争児童文学」といえる。また、これらの作品のうち、千田(2009)は「石うすの歌」では「通俗的ともいえる風景と肉体唱歌のイメージを提示しつつ、死を美化=隠蔽することにつとめている。」(p.139)、また「ガラスの花よめさん」は「戦争メロドラマの紋切り型をそのまま反復するものにすぎない」(p.149)と述べる。これらの教材は、戦争で取り残された者の悲哀にフォーカスが当てられており、学習者は親子や幼なじみ、友人との別れ、主人公の死の方に心を寄せ、同情してしまい、戦争はあくまでも舞台装置と化してしまっている。戦争がなぜ悪いのか、なぜ起こるのか、といったことまでは踏み込んで深く考えることは難しいと考えられる。

このような教材の矛盾が影響したのか、戦争児童文学教材の数が増えすぎてしまい、学習者も教師もこのような教材群を読むことに「疲弊」してしまっ

たのか。2000年代はちょうど戦争児童文学そのものがピークから衰退してきた時期とも重なる。2000年度版前後の教材減少については、その時代のコンテキストも含めて改めて考えていきたい。

5.3. 戦争児童文学教材の行く末

—第〇世代の「母」たちからの脱却—

以上、戦後の戦争児童文学教材について、その変遷の様相から、戦争児童文学教材に内在する問題点を明らかにした。なお外在の問題としては1981年に自民党から主発した国語教科書攻撃の際に、不適切な教材として「おかあさんの木」、「一つの花」、「川とノリオ」、「村いちばんのさくらの木」が批判にさらされたことがあったが、その批判内容については緻密な調査と分析によるものではなく、事実の伴わない「批判の名に値しないお粗末なもの」(安藤, 1981:298)であったため、本研究ではその出来事があったことのみ触れる。ただ、それだけ戦争児童文学教材は議論の俎上に上がることが多くあり、研究者や教師だけでなく政治の場においても着目される存在だったといえる。

戦前の軍事教材と戦後の戦争児童文学教材を通時的に捉えた際に、もちろんその方向性は、戦争児童文学の文脈と同様に180度転換しているものの、ある事象は共通して存在していることが判明した。それは「母」の存在である。

戦前は、全期に渡り登場した「水兵の母」だけでなく、第三期にのみ登場した「一太郎やあい」⁶という教材にも、戦地へ息子を鼓舞する母親像が描かれる。「皇国の母」として国のために息子たちを送り出し、涙一つ見せなかった教材の中の母の姿は、戦後は、息子を戦地に取られた悲しみを吐露し戦争を憎む姿に置き変わる。「聞けば、そなたは豊島沖の海戦にも出でず、八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かくべつの働きなかりし由、母はいかにも残念に思ひ候。何のために軍には出で候ぞ。一命を捨てて、君の御恩に報ゆるためには候はずや。」(「水兵の母」教材文)と手紙に書きしたためた戦時中の母親は、「日本じゅうの、父さんや母さんが弱かったんじゃ。みんなして、むすこを兵隊にはやれん、戦争はいやだと、いっしょけんめい言うておったら、こうはならんかった」(「おかあさんの木」教材文)と戦後の母は猛省する。戦前も戦後も、戦争を描き出した教材として扱う際に「母」は、向戦

的にも、また厭戦的にも、どちらにも非常に利用しやすかったのだといえる。

一方、第三世代と呼ばれる戦争児童文学教材群には、涙を誘う第〇世代の「母」の姿はない。「いわたくんちのおばあちゃん」では被爆で家族を亡くしたおばあちゃんの代弁者として、「たずねびと」では兄妹のみを広島に送り出すサポーターとして存在するのみである。時代状況的に、待つ立場、弱い立場として、どうしても戦争の被害者として描かれてしまうのが、第〇世代の「母」たちである。子どもの主体性を意識している第三世代の戦争児童文学教材は、第〇世代の「母」からの脱却が行われようとしているのかもしれない。

6. おわりに

以上、戦争児童文学教材について、背景に存在する戦争児童文学の戦前から戦後にかけての文脈を踏まえた上で、その内実を「なぜこれらの教材は使用されなくなったのか」という点に焦点を当て、その内実を明らかにした。その上で、今後の戦争児童文学・教材の抱える課題や展望を述べる。

本研究を通して痛感したこととして、戦争児童文学・教材を巡っての議論が1990年代から前に進んでいないことが挙げられる。西山(2017)は武藤(1991)の「戦争はなぜ起こるのか、戦争がもたらす悲劇的な結果とは何か、戦争と人間のあり方、戦争を防ぐとはどういうことかなどの問いとその考察には、虚構は馴染まないし、何も見えてこない。」(西山, 2017:13)という言葉引用し、注において武藤本人が「書かれて二十数年経つが、基本的に考えは変わっていないとして、二〇一七年に武藤本人が研究会の席で配布した」(西山, 2017:15)と記している。すなわち二十数年、戦争をどのように文学で描き出すのか、という議論の決着がついていないことを示している。しかしこの二十数年で、道徳の教科化が行われ、小学校国語教科書における戦争児童文学教材の数は減少した。ますます、戦争を文学で教える/学ぶとはどういうことなのか、戦争児童文学教材だからこそできることは何か、ということ突き詰めて考えていかななくてはならない時期に突入している。ただ、教材数こそ減ったものの、新しい第三世代の戦争児童文学教材が入れ替わりで登場した。そのことによって、どのような新しい「読み」が展開するのか、今後期待したいと

ころである。

また冒頭でも触れたように、ロシアのウクライナ侵攻により、戦争や平和をテーマにした児童文学、特に平和絵本が活発な動きを見せている。論者自身も書店や図書館などにおいて、戦争や平和を描いた絵本が目立つ場所に置いてあるのをしばしば目にするようになった。その中には、戦争がなぜ悪いのか、なぜ起こるのか、ということに迫るようなものも存在する。ニュースになるような戦争が起きると、戦争児童文学が盛り返すというのは、何とも皮肉めいた話ではあるが、今の世の中の流れは戦争児童文学の興隆を願うものにとって非常に喜ばしい傾向にある。しかし、山中が指摘する児童文学と「時代的气氛」の関係には注意が必要である。

学校図書館協議会が「今年のテーマはエコだ」

といったら、どの児童図書出版社も課題図書の指定をねらって、エコをテーマにした作品を出し、平和だといったら、平和を主題としたものを出し、作家たちもそれに励んだ。それを国家規模で実行したのが、戦時児童文学であり、「時代的气氛」である。それと同じように「時代的气氛」が、再び私たちに覆い被さる事態が恐ろしいのである。だから、権力と結びついて戦後も生き延びてきた呪術的国体原理主義の復興が恐ろしいのである。(山中, 2010:355)

この「時代的气氛」に吞まれていった児童文学者がどのような道を辿ったかについては、本研究でも触れたとおりであり、書き手も読み手も含め、今いる自分たちの立ち位置をなるべく客観視する必要がある。

世界では第三次世界大戦の懸念が広がりつつある2023年現在、日本では戦争体験者である第一世代の数が減り、戦争の悲惨な体験を直接聞くことが難しい段階に移りつつある。その際、戦争体験者による戦争児童文学は重要な文化財となりつつある。戦前の読み手に対し、日本の戦争児童文学や軍事教材が何をしたのか、その経緯を忘れることなく、そしてこれまでの戦争児童文学の蓄積を大切にしつつ、次の第四世代の戦争児童文学/教材に向け、在り方を議論し続けていく必要がすぐそこまで迫っている。

【注】

¹ 広島市教育委員会「平和教育プログラムの改定につ

いて(報告)」<https://www.city.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/202755.pdf>(2023-04-01 接続)

²東京新聞 web 「「はだしのゲン」再審議を要望 削除方針に被団協事務局長」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/233755>(2023-04-01 接続)

³中国新聞デジタル「はだしのゲン閲覧を制限 島根県松江の小中学校」<https://www.chugoku-np.co.jp/articles/-/271386>(2023-04-01 接続)

⁴第一期国定国語教科書における「感心な母」(高等小学読本巻一)は「水兵の母」と同じである。

⁵一方、シリーズ本のうち、従軍慰安婦について描いた『花ばあば』は当初日本で出版が叶わず2010年に韓国で出版され、2018年にクラウドファンディングによりようやく日本で出版された。戦争について描くことの壁や課題は未だ多い。

⁶「一太郎やあい」は、日露戦争に出征する息子を見送るため、遠路はるばる駆け付けた老母が、対岸から船に向かい「天子様によく奉公するように」と声をかけ、息子が銃を上げて応じたという内容である。

【参考引用文献】

安藤美紀夫(1981)「国語教育・文学教育と文学作品」日本児童文学者協会(著)『国語教科書攻撃と児童文学』青木書店

池野範男(2009)「学校における平和教育の課題と展望：原爆教材を事例として」『IPSHU 研究報告シリーズ』42, 406-407.

大槻和夫(1984)「状況認識の力を：平和教育の視点から」『日本文学』33(2), 20-26.

大槻和夫(2005)『平和教育への宿願：大槻和夫著作集第九巻』溪水社

奥山恵(2012)「第二次世界大戦後の戦争児童文学Ⅰ—1945～60年—」鳥越信・長谷川潮編『日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房, 101-110.

川端有子(2013)『児童文学の教科書』玉川大学出版部

菅野圭昭(1985)『文学教材研究の方法論』明治図書出版

砂田弘(1995)「戦争責任はどう問われてきたか」『日本児童文学』41(8), 14-23.

住田勝(2022)「【第三世代戦争児童文学】の概略：「たずねびと」(朽木祥 光村 5年)教材研究ノート」『日本児童文学学会 関西例会 研究発表要旨』第151回, 6-11

関口安義(1988)「戦争児童文学」日本児童文学学会

編『児童文学事典』東京書籍

田中榮一(1984)「文学教育における教材研究：小川未明「野ばら」のことなどを中心に」『日本文学』33(8), 25-39.

千田洋幸(2009)『テキストと教育：「読むこと」の変革のために』溪水社

中内敏夫(1988)『軍国美談と教科書』岩波書店

長谷川潮(1993)『日本の戦争児童文学：戦前・戦中・戦後』久山社

長谷川潮(1995)「戦時下の戦争児童文学の場合」『日本児童文学』41(8), 24-37.

長谷川潮(2000)『戦争児童文学は真実をつたえてきたか：長谷川潮・評論集』梨の木舎

長谷川潮(2017)「戦争児童文学研究に向けて」『児童文学研究』50, 17-24.

浜野卓也(1992)「再検討・戦争児童読物：日清・日露から太平洋戦争まで」『日本児童文学』38(3), 6-27.

西山利桂(2012)「第二次世界大戦後の戦争児童文学Ⅱ—1960～80年—」鳥越信・長谷川潮編『日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房, 115-125.

西山利桂(2017)「終わらない「かわいそうなぞう」問題」『学芸国語教育研究』35, 2-16

宮川健郎(1992)「戦争児童文学という「愛」：あるいは「戦争児童文学」廃止のためのノート」『日本児童文学』38(3), 56-64.

宮川健郎(1996)『現代児童文学の語るもの』日本放送出版協会

宮川健郎(2012)「第二次世界大戦後の戦争児童文学Ⅲ—1980～現在—」鳥越信・長谷川潮編『日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房, 127-137.

武藤清吾(1991)「戦争・ことば・児童文学」『教育』41(13), 51-62.

目黒強(2007)「小学校国語教科書における戦争児童文学教材をめぐるイデオロギーの検討」『児童文学研究』40, 36-38

文部省(1943)『初等科国語 教師用第6』文部省

山中恒(2010)『戦時児童文学論：小川未明、浜田広介、坪田譲治に沿って』大月書店

ユルマズ・フィリス, 溝上智恵子(2014)「戦争記憶の形成：中学校国語教科書の分析」『図書館情報メディア研究』11(2), 51-60.